

シラバスから Syllabus へ

—「研究方法論（定性）」の事例を中心にして—

佐 藤 郁 哉

- はじめに：偽物としての *shirabasu*
 I 和風シラバス：研究方法論（定性）
 II Syllabus：研究方法論（定性）
 III Syllabus の特徴と留意点
 おわりに： *shirabasu/syllabus* づくり = プルシット・ジョブズ？

はじめに：偽物としての *shirabasu*¹

「日本のシラバス集は本家本元である米国の *syllabus* と『似て非なる』もの、つまり『偽物』なのである」——こう喝破したのは、教育社会学者の川嶋太津夫である（川嶋 2018: 116）。

1991年に大学審議会から提示された「大綱化答申」では、シラバスが高等教育「改革」における1つの目玉とされていた。それを1つの重要な契機として、シラバスはわずか数年のあいだに日本中の大学に普及していった。しかし、その実態は、そのモデルとなった欧米の *syllabus* とは似ても似つかぬ、いわば日本型のシラバス、つまり「和風シラバス」である例が少なくなかった。その意味では、アルファベット表記にする際には、*syllabus* ではなく「ローマ字」風に *shirabasu* とするのが適切であろう。

表1は、その *shirabasu* ないし和風シラバスの特徴を本家本元の *syllabus* と対比させて示したものである。

表1 和風シラバス 対 Syllabus

	和風シラバス	Syllabus (洋風シラバス・米国式シラバス)
印刷版の形式	大部の冊子形式（学部・研究科単位） 各学部で数百ページに及ぶことも多い・全員に配布	講義時に配布する印刷物（クラス単位） 多くは数ページ程度・受講希望者のみに配布
教師による作成・ 提出時期	期限内に作成・半年～1年前に提出	任意・授業開始前後に配布
画一的な電子データ ベースでの提供	一般的	稀
画一性 (大学内・大学間)	高	低 (ただし、一定の共通性あり)

出所：佐藤（2019 b: 37）を元に作成

1 本節および次節の一部は、佐藤（2019 b: 33-51）を下敷きになっている。

和風シラバスと syllabus それぞれの特徴の詳細, および後者が前者へと変質を遂げていった経緯に関しては, 既に他稿で何度か解説しており (佐藤・山田 2004: 179-183; 佐藤 2019 a; 2019 b: 33-86), ここでは詳述を控える。問題の要点をひと言で言えば, 和風シラバスは, 大学に対して加えられる制度的要請 (圧力) と教育現場における実践のあいだで生じた脱連結 (decoupling) の典型とも言える形でその運用がなされてきたのだと言える。このような「和風シラバス」が抱えている問題点を列挙すると次のようになるだろう。

- ・「お仕着せ」のフォーマットによる柔軟性の欠如
- ・実際の授業内容との齟齬
- ・早期の提出にともなう記載内容の陳腐化
- ・内容の統一性の点検・監視を担当する委員の業務負担
- ・(シラバス集が紙媒体で「出版」されていた時期については) 紙資源の浪費

要するに, 和風シラバスは, 大綱化答申でうたいあげられていた高邁な目標とは裏腹に, 必ずしも「学生の学習意欲の向上を図り, 学習内容を着実に消化させる」(文部省高等教育局 1991: 5) 上で有効なツールではあり得なかった。それどころか, 教職員に対して, 無用な業務負担を課すことによって, 実質的な教育や研究に向けられるべき貴重な時間を浪費させ, 結果としてむしろ学修効果を阻害するような面さえあったのである。

本稿では, 以上のような認識を前提とした上で, 著者が本学商学研究科における講義科目である「研究方法論 (定性)」で 2022 年度に使用した syllabus の例を取り上げて, その基本的な発想やねらいについて解説していく。なお当然ではあるが, 本稿では著者の作成した syllabus を一種の模範例 (モデル) ないし規範的な「型」として提示しているわけではない。実際, 表 1 に示したように, syllabus の顕著な特徴の 1 つは, まさにその多様性である。したがって, ここでは, 著者が作成して使用した syllabus を 1 つの参考例ないし「たたき台」として提示することを主な目的としているのである。(なお, 本論には, 著者が本誌に 2019 年に掲載した論考「Syllabus とシラバスのあいだ: 大学改革をめぐる実質化と形骸化のミスマネジメントサイクルを越えて」佐藤 (2019 a) の続編としての性格があると言える。)

I 和風シラバス: 研究方法論 (定性)

以下に示すのは, 著者が本学のシラバス入稿システムで入稿して最終的に 2022 年度版として Web 上で公開されることになった原稿である。

図1 シラバスシステム上の「和風シラバス」

30560002	△研究方法論 (定性)	2 単位/Unit	秋学期/Fall	今出川/Imadegawa 講義/Lecture	火曜日 1 講時 対面授業/Face-to-face learning
Qualitative Research Methodology					佐藤 郁哉
<概要/Course Content Summary >					
<p>本講義では、実証研究の中でも特に「定性的研究」ないし「質的研究」と呼ばれる方法や技法について、資料・データの収集と分析の方法だけでなく、調査現場における基本的なマナーとエチケットおよび「立ち振る舞い方」なども含めて解説していく。</p> <p>なお、メインテキストに限らず、大学院で学習する以上は、本来一生の財産とも言うべき書籍等の文献は原則として自分で購入することを心がけたい。安易にコピー等で済ませないようにしたいものである。</p>					
<到達目標/Goals,Aims >					
定性的研究の基本的な発想が理解できるようになる。定性的研究における各種の技法の特質およびそのメリットと限界について理解できるようになる。					
<授業計画/Schedule >					
(実施回 / Week)	(内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)			
1	ガイダンス：定性的研究、定性的データとは？	復習・発表の準備			
2	各自の研究テーマおよびそのテーマにおける定性的研究法ないし定性的データの必然性についての解説	復習・予習			
3	講師の体験から 1-1	復習・予習			
4	講師の体験から 1-2	復習・予習			
5	講師の体験から 1-3	復習・予習			
6	講師の体験から 1-4	復習・予習			
7	講師の体験から 2-1	復習・予習			
8	講師の体験から 2-2	復習・予習			
9	講師の体験から 2-3	復習・予習			
10	講師の体験から 2-4	復習・予習			
11	講師の体験から 3-1	復習・予習			
12	講師の体験から 3-2	復習・予習			
13	講師の体験から 3-3	復習・予習			
14	講師の体験から 3-4	復習・予習			
15	各自の研究テーマについての振り返り	復習・発表の準備			
受講生と協議の上、授業計画を変更する可能性がある					
<成績評価基準/Evaluation Criteria >					
平常点(出席、クラス参加、グループ作業の成果等) 50%					
期末レポート試験・論文 50%					
<参考文献/Reference Book >					
特に無し					
<授業形態備考/Class type >					
対面。ただし、新型コロナウイルスの状況により、Zoom でのオンラインも併用する。					

出所：本学ホームページ <https://syllabus.doshisha.ac.jp/html/2022/0560/30560002000.html>

このシラバスは、先に指摘した和風シラバスに見られる幾つの特徴を如実に示すものと言える。例えば、上記のシラバスを入稿する際には、所定のウェブサイトから、授業の概要、到達目標、授業計画、成績評価基準、参考文献、授業形態、備考等を漏れなく入力していくことが要求されていた。これは一面で、学生にとっては、共通のフォーマットで複数の講義を比較することが容易になり、効率的に受講に関わる意思決定を可能にする資料になっていると言えるだろう²。

2 もっとも、学生が現実にはこのような種類のシラバスをどのように活用しているかという点については疑問が残る。例えば、以下は、これまで著者が勤務したり非常勤講師をつとめたりした幾つかの大学で

また、このような統一的・画一的なフォーマットで作成されたシラバスは、大学が認証評価を受審する際や教育改革関連の補助金を獲得しようとする際などにも重要な要件の1つとなる。実際例えば、幾つかの大学の自己点検・評価報告書には次のような記載が見受けられる——「4年次の履修登録単位数の上限設定、シラバスの記載内容に関する教員間の精粗の差の解消……など大学および学園全体に関する項目の大半については改善が図られ……」。同じように、大学基準協会の審査報告書には次のような記述が見られる——「全学部において、シラバスは一定の書式で作成されているが、各回の授業内容に関しては教員間の記述内容に精粗があり、調整が必要である」。また、2013年度年に文部科学省によって開始された補助金事業である「私立大学等改革総合支援事業」では、シラバスの記載内容の網羅性や「第三者チェック」が、補助金受給にあたっての評価の加点対象として3項目にわたって取りあげられていた。ちなみに、それらの項目の合計点は20点であり、「100点満点」のうちの5分の1を占めていた(文科省 2013)。

もっとも、既にふれたように、このような和風シラバスが実際に教育効果の「品質保証」や改善という上で効果的なツールないし「小道具」になっているか否かという点については、疑問が残る。事実、受講生からすれば、このシラバスをみただけでは、具体的にどのような教材を用いて、どのような学修や実習をおこなえば「定性的研究の基本的な発想」や「定性的研究における各種技法の特質およびそのメリットと限界」が「理解」できるようになるかは一向に理解できないだろう。

その意味では、本学をはじめとする日本の大学の多くで提供されている、いわゆるシラバス(集)は実際には海外の大学でコース・カタログなどと呼ばれている資料に該当するものとも言える。実際また、1990年代以前に日本の多くの大学で「講義要項」ないし「講義要綱」などという名称で作成・配布されていた小ぶりの冊子は、まさにそのような性格を持つ資料であった。その意味では、和風シラバス(集)の多くは、syllabusとも講義要綱(コース・カタログ)のどちらともつかない、中途半端な性格を持つ資料だと言える。

II Syllabus : 研究方法論 (定性)

和風シラバスが講義要綱としての性格を持つ以上、それは授業運営の実態にはそぐわない制約要因になってしまいかねない。実際にそうであれば、教員は、図1のようなシ

ㄨ 学生たちにシラバス(集)について意見を求めた際のコメントの一部である——「まあ、空いているコマかどうかとか、採点基準のところしか見ませんね。出席点があるのかどうかとか。でも、期末試験の頃になってシラバスに書いてある採点基準と違うことを言い出す先生がいるんですよ。まったく、どういことでしょうね」、「到達目標とかはまず見ませんね。特にだらだらと長く書いてあるのは完全にスルーです」(佐藤 2019 b: 57)。

ラバスはあくまでも履修登録の際の手がかりとして提供した上で、別途、より実際の講義内容に即した資料、すなわち本来の意味での syllabus を作成して配布することになる例も多いだろう。

以下に参考資料として挙げたのは、著者が実際に 2022 年度秋学期の大学院の「研究方法論 (定性)」という講義で使用した syllabus である。後で比較的詳しく解説するように、図 1 のシラバスと本稿では 15 ページ以上にわたるこの資料のあいだには、分量という点だけでなく、さまざまな点で顕著な違いが存在する。(なお、読者にとっての読みやすさを考慮すれば、以下の syllabus を本論の末尾に付録としてあげることも考えられるだろう。しかし今回は、syllabus の内容について本文中の記述を通して検討していただきたいという意図もあって、あえて以下のように全文を論文の本体の中に取り込む形をとった。)

2022.8.

火曜日 1 限・講師：佐藤郁哉

研究方法論 (定性) シラバス案 (2022 年版)

【概要】

講義のねらい 本講義では、一般に「定性的研究」あるいは「質的研究」などと呼ばれる方法について、その基本的な性格や具体的な調査技法について解説する。特に、〈受講者自身の研究プロジェクトにおいて定性的方法による分析とその結果をどのように生かしていけばよいか〉という点について、文献講読、受講者によるプレゼンテーション、討議などを通して考察を深めていく。

ある種の研究では、定性的データ、すなわち、文字テキストを典型とするような、数値化されていない資料やデータをむしろ積極的に主な情報源として活用することが少なくない。それは、多くの場合、その種のデータは数値形式に還元することによって最も重要な情報が失われてしまう可能性があるからに他ならない。そのようないわゆる「定性的研究」については、ともすれば〈「科学性」や一般性に乏しい研究〉という印象が持たれてしまうことも多い。また、その研究成果についても、主観的な印象論に過ぎないとされる場合がある。

さらに研究者自身が、定量的な研究——「科学的」な手法によって「客観的」なデータを獲得し、分析結果には一般性があるという印象が持たれることが多いアプローチ——に対して引け目や後ろめたさをおぼえてしまうこともある。また一部には、定性的データの分析に関する一見きわめてシステムティックな手法やソフトウェアが持つ疑似

科学的な装いに魅了・幻惑され、その「お作法」に従うことによって、それらの劣等感を払拭しようとする傾向もある。

本講義では、以上のような不安や劣等感を克服し、またその種のコンプレックスへの反動とも言える科学主義的傾向に陥ることを避けつつ、十分な自信を持って定性的研究に取り組んでいく上で必要となる基本的な知識と素養を身につけていくことを目指す。

100冊の技法書よりも1冊のモノグラフと実践を なお、このシラバスで紹介する文献の多くは定性的研究に関する技法書としての性格を持っている。講師としては、受講者には、それらの「マニュアル」に目を通す一方で、みずから定性的な手法を用いてデータや情報を収集し、またそれらを分析してみることを強く推奨したい。それに加えて、定性的調査の成果として発表された優れたモノグラフや論文を読み込んでいくことも欠かせない作業である。特に自分自身の研究テーマと関連が深い文献を、そのテキストにおいて使用されている資料やデータおよびそれらの経験的資料の分析法に注意を払いながら読み進めていくことは何物にも代えがたい貴重な体験になると思われる。

実際、マニュアルを読むだけで運転技術や泳法が身につくはずもないように、100冊の技法書を読みこなすよりも、一度の調査実践によって得られることの方がはるかに多いはずである。また、例えば、音楽や演劇の道を志す者にとっては、音楽学や作劇術・演技術などの技法書を大量に読破することなどよりもはるかに大切なのは、優れた——質の高い——演奏や舞台公演を鑑賞することであろう。

読むこと、ただし読み過ぎ (て頭でっかちになら) ないこと 要するに、定性的調査について学ぶ際には「読むこと、ただし読み過ぎないこと」が重要なのである。これについては、フィールドワークの第一人者であり、講師自身にとっては恩師 (メンター) でもあった、米国の社会学者ジェラルド・サトルズによる次の指摘が示唆的だろう (第10回目講義の読書課題②から。強調は引用者)。

何にもまして、フィールドワークというのは技芸 (わざ: craft) なのであり、本を読むだけで学べるようなものではないということをお肝に銘じておく必要がある。ブロック積みのようなものである。コツをつかむためにはまず自分の手でやってみなければならない。試行錯誤もあれば、練習もあり、徒弟修業の期間もある。この技芸 (わざ) の多くの部分は口伝や模倣を通して教えられるものである。いまだ明らかにしていない側面もある。実際にやってみる前に、フィールドワークに関して書かれた本を読むのに余り時間を費やさないことである。第一、フィールド調査が好きになれないかもしれないし、もともと調査には向いてないのかもしれないのだ。誰もがブロック工にはなれる訳ではないように。

先に、本講義のねらいとして「十分な自信を持って定性的研究に取り組んでいく上で必要となる基本的な知識と素養を身につけていくこと」を挙げた。これは、言葉を換え

て言えば、自分の研究の方法や成果の正当性を主張するための最低限の理論武装を心がけることだとも言える。ただし、その理論「武装」が行き過ぎてしまって、定性的調査に関する文献の読み込みにひたすら専念することは決して得策だとは言えない。ひと昔前のような(今でも?) sink or swim 式の「現場主義的な修業」は確かにナンセンスである。しかし、だからと言って、現在書店にあふれている定性的調査関連のマニュアルをひたすら読み漁ることはそれ以上に無意味なのである。

例えば、*The Sage Handbook of Qualitative Research* は2017年現在で第5版となっているが、そのページ数は各版とも2段組で1000ページ近くに及んでいる(なお、同ハンドブックの邦訳は3巻本!)。このようなハンドブックを読破してしまおうなどというのは、無謀な試み以外の何物でもない。それよりも一度の実践から学べることの方がはるかに多いはずである。

また、適性という点についても考えてみたい。サトルズの「誰もがブロック工にはなれる訳ではないように」というコメントはフィールドワークに関するものであるが、同様の点は定性的調査一般にも当てはまる。実際、定性的調査については定量的調査以上に「向き不向き」という点に注意する必要があるのである。

講義の構成 本講義は以下のような6部構成となっている。

第Ⅰ部 導入

第Ⅱ部 定性的方法とは何か? なぜ定性的方法なのか?

第Ⅲ部 どのように定性的なリサーチを設計すればよいか?

第Ⅳ部 どのように定性的データを収集すればよいか?

第Ⅴ部 どのように定性的データを分析すればよいか?

第Ⅵ部 どのように定性的調査の成果を論文としてまとめればよいか?

以上の構成は、あるところで講師が解説してきた「2W1H」(佐藤 2021: 39-47) という区分に即して言えば、第Ⅰ部が主に What (定性的方法とは何か?)、第Ⅱ部は What と Why (なぜ定性的方法なのか?)、第Ⅲ部以降は How (to) (どのようにして実際に定性的調査をおこなえばよいか?) ということになるだろう。

第Ⅰ部 導入

1. ガイダンス 定性的研究を志した際の「動機」について改めて確認してみる

- ・受講生及びその調査プロジェクトの「自己紹介」:「定性的研究」に関するイメージ、自分の調査計画における定性的方法の位置づけについて考えてみる

- ・講師解説：定性的研究の強みと魅力とは？

2. 「名作」を読み込んでみる

- ・定性的研究の成果として発表された優れたモノグラフを読み込み、その記述と分析の技巧について考察するとともに、「定性的」ないし「質的」という言葉でくくられる研究方法論や具体的な手法および資料・データの多様性について理解する。なお、講義では特定の章や節のみの講読を課すが、それぞれの文献については、折を見て通読してみることを強く推奨したい。

【読書課題】

- ①クリステンセン、C. M. (伊豆原弓訳) (2001) 『イノベーションのジレンマ』 翔泳社。
 - ▶ 「序章」 「第1章 なぜ優良企業が失敗するのか：ハードディスク業界に見るその理由」 「第10章 破壊的イノベーションのマネジメント：事例研究」
- ②ローゼンブラット、A. (飯嶋貴子訳) (2019) 『Uberland ウーバーランド：アルゴリズムはいかに働き方を変えているか』 青土社。
 - ▶ 「序論 アプリを使って仕事をする」 「5 背後に隠れて：Uber はどのようにアルゴリズムを利用してドライバーを管理するか」 「付録1 研究方法：私はUberをどのように調査したか」

or

- ②クンダ、G. (樫村志保訳) (2005) 『洗脳するマネジメント：企業文化を操作せよ』 日経BP出版センター。
 - ▶ 「第1章 文化と組織」 「第3章 イデオロギー：目に見えるテック文化の経典」 「付録 手法：ある種の告白」
- ※①と②はどちらも広い意味での定性的研究と言える。それぞれのモノグラフは、どのような意味で「事例研究」と言えるだろうか？ また、それぞれどのような具体的な手法やデータが用いられているだろうか？

【推奨図書】

- ①金井壽宏 (1994) 『企業者ネットワークの世界』 白桃書房。
 - ②鎌田慧 (1983) 『自動車絶望工場』 講談社文庫。
 - ③グレイザー、D. & ストラウス、A. (木下康仁訳) (1988) 『死の Awareness 理論と看護：死の認識と終末期ケア』 医学書院。
- ※①は学術書であるが②はジャーナリストによる「潜入ルポ」的な作品である。実際、エスノグラフィー的な研究書と潜入ルポないし体験ルポ的な作品とのあいだには多くの共通点がある。③は社会学系のモノグラフであり、後で解説する「グラウンデッド

ド・セオリー・アプローチ (GTA)」の原点とも言える作品である。GTA に関する技法書 (グレーザーやストラウス自身によるものを含む) や概説書あるいは GTA にもとづいて書かれたとされる研究論文ないし学術書を読む前に、まずもって③に目を通しておきたい。

第Ⅱ部 定性的方法とは何か? なぜ定性的方法なのか?

3. 歴史的背景とデータの性格

- ・ 学問領域や国によってある程度の違いはあるものの (①、②)、定性的研究の価値が広く再認識されるようになっていったのは 1970 年代後半からであると考えられる。現在では、さまざまな分野において定性的調査の意義が認められ、それにもなって関連する書籍が盛んに刊行されている。また、大学院等における教育プログラムにも組み込まれて一定の「市民権」を得ている。しかしながら、この定性研究ブームの中で必ずしも「質の高い質的研究」が量産されているとは言えない面がある (③第1章)。
- ・ 例えば「ベタな実態調査型」の見聞録的な調査報告 (佐藤, 2021: 166-167) は少なくない。一方では、業績達成志向の風潮がある中でジャーナル論文の刊行を目指す場合には、定性的研究が敬遠されるという傾向もある。
- ・ このような問題の背景の1つとしては、分析対象としての定性的 (質的) データの扱いにくさという面があげられる (③第2章)。
- ・ なお、①は、その目次に見るように、様々な研究手法について概観するための一種の「見取り図」としては有用だが、大部の書籍の割にはそれぞれの手法に関する解説は比較的短く、技法書 (マニュアル) としてはやや物足りない面がある。

【読書課題】

- ① フリック、U. (小田博志他訳) (2011) 『新版 質的研究入門』春秋社
 - ▶ 「第2章 質的研究：なぜ、いかに行なうか」+目次
- ② ベルク、R. 他 (松井剛訳) (2016) 『消費者理解のための定性的マーケティング・リサーチ』碩学舎・中央経済社
 - ▶ 「第1章 インTRODクシヨN」+目次
- ③ 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法』新曜社。
 - ▶ 「第1章 7つのタイプの『薄い記述』」、「第2章 豊かで厄介な質的データ」

【推奨図書】

- ① ギアツ、C. (梶原影昭他訳) (1991) 『ローカル・ノレッジ：解釈人類学論集』岩波書店。
 - ▶ 「第1章 薄れゆくジャンル：社会思想の再構成」

②クカーツ、U. (佐藤郁哉訳) (2018) 『質的テキスト分析法』新曜社.

▶「第1章 質的データの分析：さて、いかにおこなうべきか？」

※定性的研究と定量的研究の関係について検討していく際には、後者のモデルとされることが多い自然科学系の研究パラダイムとの関係について考えざるを得ない。①は1980年に発表された論考であり、社会科学における研究のモデルとして、自然科学由来あるいは人文学系のどちらでもない独自のアプローチが可能である、という点を示唆したものである。なお、「定性的(質的)データ分析」という場合には、データそれ自体の性格という以外に、データの種類の如何に拘わらず、特定の分析アプローチが持つ本質的な性格という意味が含まれている場合がある。これについては、②の簡潔な解説が参考になるだろう。

4. 事例研究とは？ 事例について知ること、事例を通して知ること

- ・定性的研究に関しては、「法則定立的アプローチ 対 個性記述的アプローチ」という古典的な二分法を引き合いに出して、統計的研究が前者、事例研究は後者の典型であるとする解説がなされる場合がある。
- ・もっとも、統計的手法による定量的研究を専門にしていた社会学者の盛山和夫が指摘しているように、統計的研究を経て得られる結果それ自体は、比較的大量の個別事例を対象とした観察データにもとづく記述ないし推論に過ぎないとも言える。実際、その分析結果は、その観察内容を越えた「法則」性や理論的普遍性に関する認識とは別の次元に属するものなのである(盛山, 2004: 29)。
- ・また、全ての統計的な研究は時間的・空間的な限界があるという意味では、まぎれもなく事例研究としての性格を持っているとさえ言える(Ragin, 1992: 2; 佐藤, 2021: 271-272)。
- ・この回では、これらの点について、上記に代表される二分法に関する解説(①)を踏まえた上で、現実の経営研究における事例研究の位置づけについて理解していく(②、③)。例えばある種の統計調査の効用と限界については、M. クスマノの「『高度5万フィートから俯瞰』して解釈する難しさ」(②)という指摘が示唆的であろう。またM. クスマノの訳書では何を指して「法則」(原著では principles) という訳語をあてているか、という点についても考えてみよう。

【読書課題】

①オルポート、G. W. (福岡安則訳) (2017) 『質的研究法』弘文堂.

▶「第4章 法則定立的利用と個性記述の利用」

②クスマノ、M. A. (鬼澤忍訳) (2012) 『君臨する企業の「6つの法則」』日本経済新聞出

版社.

▶ 「序章『君臨しつづける企業』の法則」「補遺 I 研究上の課題:『ベストプラクティス』を求めて」

③井上達彦 (2014) 『ブラックスワンの経営学』日経 BP 社.

▶ 「まえがき」「第 1 章 『UFO が来る』と信じる人にも理由がある:因果関係を解き明かす事例研究の力」、「第 7 章 ビジネスの実務に役立つ事例研究の方法:『こだわり』と『わりきり』の選択」

④佐藤郁哉 (2006) 『フィールドワーク 増補版』新曜社.

▶ 「事例研究」、「サンプリング」

【推奨図書】

①ヴィンデルバンド、W. (篠田英雄訳) (2016) 「歴史と自然科学」(『歴史と自然科学・道徳の原理に就て・聖』岩波書店所収).

②カー、E. H. (近藤和彦訳) (2022) 『歴史とは何か 新版』岩波書店.

③Ragin, C. & Becker, H. S. (1992) *What is a Case?* Cambridge University Press.

④Flyvbjerg, B. (2011) “Five Misunderstandings about Case-Study Research” In Seal, C. et al (eds.) *Qualitative Research Practice*. SAGE. (本学図書館電子本にあり)

⑤野家啓一 (2016) 『歴史を哲学する』岩波書店.

※①は「法則定立的 (nomothetisch [独], nomothetic [英]) 研究 対 個性記述的 (idiographisch, idiographic) 研究」という対立図式の原点とも言える哲学的論考である。②は歴史学における古典的名著であり、史料を含む経験的資料の「事実」とそこから読み取れるもの (解釈) とのあいだの緊張関係に関する多くの示唆が得られる。③は刊行後 30 年を経て事例および事例研究の方法論に関する中古典とも言える位置づけとなった論文集である。その論集でも何度となく指摘されている事例研究をめぐる各種の誤解については、④にきわめて簡潔にまとめられている。⑤はカーの原著が 1961 年に刊行されてから半世紀以上が経過した時点において歴史学が科学哲学との対話の中で到達した 1 つの地点を示している。また、この文献にはヴィンデルバンドの議論の背景に関する平明な解説が見られる³。

5. トライアングレーションと混合研究法

・現実におこなわれてきた社会調査の中には、「定量 対 定性」という単純な二分法に収まりきらない例も少なくない。(方法的) トライアングレーション (①) と混合研究法 (②) は、性格の異なる調査法ないしデータを意識的・戦略的に組み合わせることによって研究対象を立体的に浮かびあがらせていこうとするアプローチとして代

3 ⑤の文献は実際に 2022 年版の syllabus に記載されていたものではなく、本学部の山内雄気先生から貴重なアドバイスをいただいて追加したものである。

表的なものである。

- ・もっとも、特にトライアンギュレーションないし混合研究法と銘打っているわけではなくても、優れた調査報告の多くは、文献資料やインタビュー調査による知見と数値データの分析結果を組み合わせて活用している。③はその好例である *Product Performance Development* (邦訳『製品開発力』) で用いられた各種の手法とその組み合わせについて著者の1人である藤本が解説したものである。

【読書課題】

- ①佐藤『フィールドワーク 増補版』(再掲)
 - ▶「恥知らずの折衷主義」、「トライアンギュレーション (方法論的複眼)」
- ②クレスウェル, J. W. (抱井尚子訳) (2017)『早わかり混合研究法』ナカニシヤ出版。
 - ▶「第1章 混合研究法的基本的特徴」、「第4章 混合研究法の基本型と応用型デザイン」
- ③藤本隆宏 (2005)「*Product Performance Development* ができるまで」(藤本隆宏ほか『リサーチ・マインド 経営学研究法』有斐閣所収)
- ④佐藤郁哉『暴走族のエスノグラフィー』(再掲)

【推奨図書】

- ①金井『企業者ネットワークの世界』(再掲)

▶「第1章 イントロダクション：企業者ネットワークの世界へ」、「第3章 研究課題と調査方法」

※異なる調査法の組み合わせの醍醐味について知る上では、そのようなアプローチにもとづいて書かれた文献を参照することが重要なポイントになる。その意味では読書課題③とともに『製品開発力』に目を通しておくことが不可欠となる。同じように、『企業者ネットワークの世界』についても、トライアンギュレーションについて解説した第3章だけでなく、本体の報告書に目を通しておくと良いだろう (大部の書籍なので斜め読みでも可)。

6. ゲスト・スピーカーの体験から学ぶ

- ・定性的研究法について学ぶ上では、受講者がみずから何らかの手法を用いてデータ収集と分析をおこなうことに加えて「先達」の体験談を聞くことも非常に重要なポイントである。つまり、実際に定性的手法を用いて調査を実施しその成果を論文ないし研究書としてまとめた経験がある研究者をゲストスピーカーとしてお迎えして、調査体験に関するお話をうかがうことである。事実、その種の体験談は、特に修士論文としてまとめる際の時間管理や執筆作業に関するコツ、また初学者が陥りがちな落とし穴などについて知る上で非常に参考になるに違いない。

第Ⅲ部 どのように研究全体を設計すればよいか？

7. リサーチ・デザインの多様性と基本的な構成要素

- ・本格的なデータ収集の作業に入る前、もしくはある程度調査が進んだ段階では、調査の基本的な構想ないし設計について確認することによって、リサーチ・デザインについて自覚しておく必要がある。
- ・各種の分析図式は、基本的な問題設定に関わる問い（リサーチ・クエスション）と仮説に加えてデータの収集・分析に関わる方針の目安をつけていく上で重要な手がかりになる場合が多い (①)。
- ・主として定性的手法を用いる調査の場合には、研究対象を捉える上での基本的な時間軸（週及的・スナップショット的・縦断的）や事例の範囲（単一事例を深掘りするのか複数事例に「横串を差して」比較していくのか）などの組み合わせについて考慮しておく必要がある (②)。
- ・もっとも、建築物の設計図などとは違って、社会調査のリサーチ・デザインの場合には、事前の計画だけでなく、さまざまな試行錯誤を含む偶発的な要素が含まれている時にこそ実りあるものになる例が少ない (①)。

【読書課題】

- ①佐藤郁哉 (2021) 『ビジネス・リサーチ』 東洋経済新報社。
 - ▶第7章「リサーチ・デザイン」
- ②フリック 『質的研究入門』 (再掲)
 - ▶第12章「いかに質的研究をデザインするか：概観」

【推奨図書】

- ①佐藤郁哉 (2021) 「実践型仮説による命懸けの跳躍」『同志社商学』 第73巻第4号
 - ▶補論2「『リサーチ・デザイン』の多義性」

※リサーチ・デザインという用語はきわめて多義的である (①)。定性的研究との関連で特に注意が必要なのは、この用語がデータの収集・分析に関わる具体的な方法の分類に限定して使用されることがある、という点である。そのような用語法の典型例の1つに、第5回目の講義の読書課題②の著者である J. W. クレスウェルによる『研究デザイン 質的・量的・そしてミックス法』がある。

第IV部 どのように定性的データを収集すればよいか？

8. 既存資料 (available data)

- ・社会調査では、既に誰かによって収集されていたり一次的な分析がなされたりしている資料やデータを二次利用する場合が少なくない。その種の既存資料には、数値データが中心のものもあれば文字テキストなどの非数値データが中心のものもある (①)。さらに近年顕著になっている、オンラインで入手できる情報の爆発的増加は、二次資料の利用可能性を大幅に拡大している。
- ・かなり古いものになってしまうが、②には企業・産業関連の情報を含む定期刊行物やインターネット経由でアクセスできる情報がリストアップされている。これを1つの手がかりにして、よりアップデートされた情報をチェックしてみると良いだろう。

【読書課題】

- ①佐藤郁哉 (2015) 『社会調査の考え方 [下]』東京大学出版会。

▶第13章「既存資料」

- ②田尾雅夫・若林直樹編 (2001) 『組織調査ガイドブック：調査党宣言』有斐閣。

▶「第2-1章 既存データ (二次データ) の収集と調査企画」

【推奨図書】

- ①沼上幹 (1999) 『液晶ディスプレイの技術革新史：行為連鎖システムとしての技術』

白桃書房。(特に、pp.25-26 参照)

- ②クリステンセン、C. 『イノベーションのディレンマ』(再掲)

※上述したように、現在ではさまざまな情報がオンライン経由で入手可能になっている。もっともネット情報のみに依存している限りは、分析が手薄になる恐れがある。

①と②は、それぞれ10数年ないし数十年分の雑誌の記事を元にして自前のデータベースを作成した上で分析をおこなっている (本講義の講師も演劇誌3誌に掲載された記事を2ヶ月ほどかけて通覧した上でデータベースを作成したことがある)。修士論文の場合には、その種のデータベース構築には時間的にもマンパワーという点でも制約がある例が多い。しかし、誰でも「ネットでちゃちゃっと」入手できる情報だけでは、研究や知見のオリジナリティという点ではおのずから限界があるだろう。

9. インタビュー (聞きとり)

- ・「百聞は一見にしかず」という言い方があるが、調査現場の内部者の見解やディープな情報を得るためには聞き取りが欠かせない手続きになる場合が多い。つまり、「百

見は一聞にしかず」という例も少なくないのである。

- ・ただし、建前的な証言や表面的な情報の範囲を越えてより確実に詳細な情報を獲得していくためには、複数の人々の証言を突き合わせたり、現場観察の結果などと照合したりして、聞き取った内容を裏づけていく作業が不可欠になる場合が多い。
- ・例えば、①からは聞き取りが現場観察と組み合わせられることによって深みのある情報を得る上で有効な手段になっていることが示唆される。また②は、現場密着型の「問わず語り」が期せずして形式的な「面接」などでは到底得られない貴重な情報を入手する上で効果的である、としている。

【読書課題】

- ①小池和男 (2000) 『聞きとりの作法』 東洋経済新報社.
 - ▶ II 「聞きとり」 (pp.89-133)
- ②佐藤 『フィールドワークの技法』 (再掲)
 - ▶ 「第5章 聞き取りをする：『面接』と『問わず語り』のあいだ」

【推奨図書】

- ①山田一成 (2010) 『聞き方の技術：リサーチのための調査票作成ガイド』 日本経済新聞出版社.
- ※①は最終的には数値データに還元される調査票を用いた調査のためのガイドブックであるが、聞き取りの際の質問の仕方についても多くのヒントが含まれている。例えば、以下の指摘はさまざまな手法による調査にとって多くの示唆を含んでいると言えるだろう——「優れたリサーチャーになるためには、文化人類学者のように目の前の日常を『見知らぬ世界』として見つめ直す力が必要になります」(pp.13-14)。

● (フィールド) 実習 1：インタビュー

あらかじめ受講者が相談の上で決めておいたトピックについて、それぞれ 10 分程度、

- ①聞き手と話し手の役割を交代して (=ロールプレイング) インタビューをおこなう。

→10分×2通り=20分 ※インタビューの内容は録音する

受講者が奇数の場合は、1対1ではなく1(話し手)対2(聞き手)の組み合わせも可

- ②ついで、聞き取りメモを元にして講義時間内に可能な範囲で記録を作成する
- ③Notta ないし CLOVA Note 等を使って①の録音記録の書き起こし記録ファイルを作成してみる
- ④講義時間外の各自作業：②と③の記録を比較してみる

→④については、特に提出する必要はない。各自の研究テーマの必要性を考慮して

判断されたい

⑤講義時間外の各自作業：可能であれば、ケバ取り・整文と最初の小見出し作り

→ケバ取り、整文済みの Word ファイルを 12 月 4 日 15 : 00 までに e-class に提出する

※ケバ取り・整文・素起こし等についてはウェブ上にさまざまな解説がある

例えば、以下を参照

<https://xn--3kq3hlnz13dlw7bzic.jp/transcription-unnecessarywords/>

<https://tape-okoshi.mints.ne.jp/kebatori>

◎今回の記録および現場観察実習の記録 (Word ファイル) を 12、13 回目講義における定性データ分析法の素材として使用する予定である

10. エスノグラフィー・現場観察

- ・「今や猫も杓子もフィールドワーク」(ある翻訳書の惹句) という言い方があるように、最早フィールドワークも「エスノグラフィー」も手垢のついた言葉になってしまった観がある。これに関連してエスノグラフィーの第一人者であった米国の社会学者ハーバート・ガンズは、今から 20 年以上前の時点で次のように皮肉まじりに宣言している——「エスノグラファーなどというレッテルを私に貼ろうとするいかなる試みも峻拒する」(Gans, 1999: 544)。
- ・もっとも、どのようなやり方であるにせよ、物事がまさに起きている社会生活の現場に身を置いて五感を駆使して現象を観察し、それをつぶさに記録にとどめることは、確実な情報を得る上では欠かせない作業である。実際、それは(特にオンライン情報の収集・分析を中心とする)デスクワークやライブラリーワークのみでは決して得られない貴重な情報となるに違いない。
- ・事実、例えば労働現場に身を置いておこなわれた数々の優れた民族的研究(エスノグラフィー)は、今なお我々に現場調査ならではの貴重な知見を提供してくれている(①)。
- ・フィールドワークないしエスノグラフィーの方法や技法に関しては、30 年ほど前の状況とは様変わりして、ブームと言えるほどに解説書が量産されている。もっとも、例えば演技術や作劇法に関する解説書が大量に刊行されたからと言ってそれで優れた演劇公演が出てくるわけなどないように、調査法のマニュアルの「洪水」が必ずしも優れたエスノグラフィーの刊行に結びついてきたわけではない。(また、現場調査に関する無反省の礼賛は「現場至上主義」とでも呼ぶことができるマインドセットを生み出すことがある。)
- ・先に 100 冊の技法書よりも一度の実践をと述べたように、②に簡潔にまとめられているような基本的な心構えや注意点を身につけた上で現場調査をおこなってみることの

方がはるかに重要だと言える。また、それと並行して、優れたエスノグラフィーを読み込んでいくことも大切な作業になる。

【読書課題】

- ①佐藤郁哉 (2002) 「労働現場の民族誌」『日本労働研究雑誌』第44巻第2・3号
(http://db.jil.go.jp/db/ronbun/zenbun/F2002070003_ZEN.htm)
- ②サトルズ、G. (佐藤郁哉訳) (2000) 「フィールドワークの手引き」(好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房所収)
- ③佐藤『フィールドワークの技法』(再掲)
 - ▶「第1章 暴走族から現代演劇へ：体験としてのフィールドワーク」

【推奨図書】

- ①エマーソン、R 他 (佐藤郁哉他訳) (1998) 『方法としてのフィールドノート』新曜社.
- ②ミンツバーグ、H. (池村千秋訳) 『マネジャーの実像：「管理職」はなぜ仕事に追われているのか』日経 BP 社.
▶付録「マネジメントの8日間」(特に pp.370-381)
- ③横田増生 (2017) 『ユニクロ潜入一年』文藝春秋.
- ④ブラッドワース、J. (濱野大道訳) (2019) 『アマゾンの倉庫で絶望し、ウーバーの車で発狂した』光文社.

※現場密着型のフィールドワークでは、「(体験) すること」および「見ること」や「聞くこと」に加えて、それらの知見について詳細に「書き留めること」が非常に重要な意味を持っている。その着実な筆記の作業を通して現場体験やそれによって得られる情報は、将来にわたって何度となく参照し再分析することができる資料となっていくのである。①は、現場調査における最も重要な記録であるフィールドノーツの記載法と分析法について詳細に解説した画期的な技法書である。②には①とは少し違った観点からマネジャーに密着しておこなわれた観察研究の方法論が紹介されている。また同書は、著者である H. ミンツバーグによる名著『マネジャーの仕事』(白桃書房、1993)の続編でもある。第2回目の講義では鎌田慧の『自動車絶望工場』をジャーナリストによる潜入ルポ的な作品として紹介した。③④なども同種のルポルタージュとして興味深く読むことができるだろう。

11. フィールド実習2：現場観察と観察記録

※教室での講義はおこなわない。

当該講義日ないし任意の日 (フィールド実習同様、大学の休日期間をあててもいいだ

ろう)に受講者全員で同一場面を30分程度観察し、それを各自が独自の方法でフィールドノートとしてまとめる。その観察記録はe-classに所定の日までにWordファイルとして提出しておき、相互に閲覧する。なお、そのファイルは、先にあげたインタビュー記録と同様に12、13回目の講義における分析対象になる。

→ファイル提出期限(e-class)=12月23日(金)15:00

注意!『フィールドワークの技法』第4章では、フィールドノートの書き方について解説している。しかし、同書164ページの「読者への警告」にあるようにその解説は、一度でもいいから実際に自分なりのやり方で観察記録=フィールドノートを書いてみた後で読むことを強く勧めたい。

第V部 どのように定性的データを分析すればよいか?

※MAXQDAの無料試用期間(14日間)が限定されているため、シラバスと講義日程の順番が逆になり、第VI部の内容(=発表と論文の執筆)を先行させる場合がある。

12. 定性的データ分析法:導入(「グラウンデッド・セオリー」を中心にして)

- ・第3回目の課題図書第2章のタイトルは「豊かで厄介な質的データ」というものであった。事実、一見不定型きわまりない文字テキストなどの資料やデータは、定性的研究をおこなう者にとって頭痛の種になることが多い。また、分析結果が「読書感想文」ないし印象論的な解釈に過ぎないと評されることも少なくない。
- ・「グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)」は、その意味で、定性的研究を志す人々にとってはある種の福音であったとも言える。もっとも、GTAの一部は、独特の用語法を特徴とする「お作法」と化してしまっているきらいもある(③)。
- ・①では、以上のような点を念頭において、GTAを初めとする、文字テキストの定性的コーディングに始まる分析法の本質的な要素を「脱文脈化」および「再文脈化」としてとらえて解説している。
- ・定性データ分析に含まれる脱文脈化と再文脈化の意義について理解する上では、これがある種の定量的調査におけるデータ縮約(data reduction)との関係で考えてみるのが有効であろう。
- ・つまり、統計調査などでは経験的資料に本来含まれてははずの情報に数値化の作業を通して脱文脈化され「還元(reduction)」されてしまうことが多いのに対して、良質の定性データ分析では、むしろそれを全体的な意味の文脈の中に位置づけて新たな情報を構成して「拡張(enhancement)」していくことになるのである(Ragin 1994; Smitthson 2000; 佐藤 2022)。
- ・②は第2回目の講義の推奨図書として挙げた文献の再掲である。GTAがマニュアル

化される以前の卓抜な分析と解釈が堪能できるはずである。

【読書課題】

①佐藤郁哉『質的データ分析法』(再掲)

- ▶「第1章 7つのタイプの『薄い記述』」(再掲)、「第2章 豊かで厄介な質的データ」(再掲)、「第3章 定性的コーディング」、「第4章 脱文脈化と再文脈化」

②グレーザー&スト劳斯『死のアウェアネス理論と看護：死の認識と終末期ケア』(再掲).

- ▶「第1章 終末認識の問題」、「第3章 『閉鎖』認識」、「第4章 『疑念』認識」、「付録 データの収集と分析の方法論」

③佐藤郁哉(2008)『実践 質的データ分析入門』新曜社.

- ▶第10章『「データ密着型理論」としてのグラウンデッド・セオリー』

【推奨図書】

①グレーザー、D. &スト劳斯、A. (1996) (後藤隆他訳)『データ対話型理論の発見：調査からいかに理論を生み出すか』新曜社.

②スト劳斯、A. &コービン、J. (操華子・森岡崇訳) (2012)『質的研究の基礎 第3版』医学書院.

③シャーマズ、C. (岡部大祐他訳) (2020)『グラウンデッド・セオリーの構築 第2版』ナカニシヤ出版.

※GTA については、現在までに膨大な数の解説書やマニュアルが刊行されてきた。ここでは、その中でも代表的なものを3点だけ挙げておいた。①は、その原著が1967年に刊行された、GTAの創始者である2人の著者による古典的技法書である。②と③は、それぞれGTAの継承者が中心になって執筆した解説書であり、それぞれGTAのマニュアル化や新たな流派の誕生に寄与してきた。なお、③は大部のテキストブックであり、〈ざっと目を通しておいてから定性データ分析を実践し、必要に応じて再読する〉という読み方が最適であろう。

13. 定性的データ分析法：展開

- ・資料やデータの量が比較的少ない場合には、文字テキストなどについては、昔ながらの「紙と鉛筆とハサミ」で分析をおこなうこともできる。しかし、データ量が一定レベルを越えると、そのようなアナログ的な分析法では十分に対処できなくなる可能性が出てくる。
- ・そのような時に威力を発揮するのが、CAQDA (Computer-Assisted Qualitative Data Analysis) ソ

フトウェアないし単に「QDA ソフト」などと呼ばれるアプリケーション・プログラムである。

- ・①では、その種のソフトウェアの概要とその背景となっているデータ分析の基本的な原理について解説しておいた。なお、これは『日本労働研究雑誌』第665号に掲載された以下の論文の再録である。

<https://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2015/12/pdf/081-096.pdf>

- ・②は QDA ソフトの中でも代表的な MAXQDA のマニュアルである。旧版用であるが、基本的な操作法は旧版と最新版にはかなりの共通点がある。また、以下のウェブサイトには最新版の操作法に関するオンラインの解説がある。

<https://www.lightstone.co.jp/maxqda/learning.html#10>

- ・③では、QDA ソフトに限らず各種のハードウェア（カメラ、録音機等）を使用することの効用と注意点について解説している。

【読書課題】

- ①佐藤郁哉 (2018) 「補論 質的データ分析の基本原則と QDA ソフトウェアの可能性」
(クカーツ『質的テキスト分析法』(再掲) 所収)
- ②MAXQDA マニュアル
→e-class からダウンロード可能
- ③佐藤『フィールドワーク 増補版』(再掲)
▶「第IV部 ハードウェアとソフトウェア」

【推奨図書】

- ①佐藤『質的データ分析法』(再掲)
 - ②クカーツ『質的テキスト分析法』(再掲)
- ※②と前回の講義の読書課題として一部を取りあげた①は、ともに定性的データ（質的データ）、特に文字テキストデータの分析に関する解説書であるが、QDA ソフトの活用法についても触れている。なお、②の第4章では、テキスト分析における主要な方法として、テーマ分析、評価分析、類型構築式テキスト分析の3つを挙げている。

第VI部 どのように定性的調査の結果を論文としてまとめればよいか？

14. 研究成果の発表、論文のまとめ方・書き方

- ・どのような学問分野であれ、論文のまとめ方や書き方については共通するコツや注意点が多い。①は自然科学系の論文を英語で執筆することを前提にした（ややハイテンション気味の）解説書であるが、日本語での論文執筆にも共通する多くのアイデアが含ま

れている。特に、〈研究成果がまとまった段階で何はさておいても一心不乱に執筆作業に取り組む〉という点は、社会科学系の定性的研究の場合にも重要なポイントである。

- ・ もっとも、定量的調査や自然科学系の実験などとは違って、長丁場になることが多い定性的研究の場合には、むしろデータの収集と分析や論文の作成、さらにはリサーチ・クエスションと仮説の定式化の作業までも含めて同時並行的に進めていった方が実りある結果になる場合が多い。②ではこのような作業の進め方を「漸次構造化法」と名づけて、その具体的な手順について解説している。

【読書課題】

- ① 酒井聡樹 (2015) 『これから論文を書く若者のために 究極の大改訂版』 共立出版。
 - ▶ 「第3部第1章 効率の良い執筆作業」、「第3部第2章 なかなか論文を書けない若者のために」
- ② 佐藤 『フィールドワークの技法』 (再掲)
 - ▶ 「第6章 民族誌を書く：漸次構造化法のすすめ」

【推奨図書】

- ① 佐藤 『質的データ分析法』 (再掲)
- ② エマーソン他 『方法としてのフィールドノート』 (再掲)
 - ▶ 「第7章 民族誌を書く」
- ③ ヴァンマーネン、J. (森川渉訳) (1999) 『フィールドワークの物語』 現代書館
- ④ ベッカー、H. S. (2012) (小川芳範訳) 『ベッカー先生の論文教室』 慶應義塾大学出版会。

※ 定性的研究の場合にはインタビューや現場観察の記録が非常に重要な情報源となっている例が多いが、それらの記録を論文の中にどのように織り込んでいけば良いかという点には非常に悩ましい問題が含まれている。事実、自分の問題関心や仮説にとって都合の良い記録をつまみ食いの引用する「ご都合主義的引用型」あるいは論文の前後の文脈をほとんど無視して生データに近い証言の記録などを長々と引用する「引用過多型」的な記述の例は枚挙にいとまがない (①第1章)。また、どの記録を直接引用もしくは間接引用として論文の中に織り込んでいくか等という点について判断に苦しむ場合も多い。これらの点に関しては、②の解説が参考になるだろう。③は、より根本的なレベルで、フィールドワークの結果を民族誌テキストとして表現していく際の文体的・修辭的特徴ないし物語ジャンルとしての性格を「写実的物語」「告白体の物語」「印象派の物語」の3つに分類して解説している。(なお、③の続編とも言えるエッセイが原著の第2版 (Van Maanen 2011) にエピローグとして含まれており、またほぼ同内容の日本語版は、

金井壽宏ほか (2011)『組織エスノグラフィー』で読むことができる。)④は、1986年に刊行されてベストセラーとなった原著の第2版(2007)の邦訳である。邦題は「論文教室」となっているが、ありきたりの論文作成マニュアルではない。むしろ学術論文風の悪文を書くことになってしまう社会的背景について明らかにした上で、どのようにすれば明快な文章を書くことができるかという点について実践的なアドバイスを提供しているのである。原著者の個人的なエピソードも満載であり、是非一読を勧めたい。

※このシラバスのバイアスと限界

本シラバスでは、定性的調査をめぐる What、Why、How (to) についてやや駆け足気味にひと通りの解説をおこなうことを想定して一連の講義内容を構成してみた。通読してみても既に明らかであるかも知れないが、このシラバスに含まれている文献は明らかに「社会学寄り」であり、また経営学寄り、特に組織研究に関連するものが多い(そして、何よりも講師自身の文献が多すぎる!)。したがって、例えば会計学やマーケティングあるいは経営史等を専攻している教員の方々および院生諸氏には物足りないと思われるかも知れない。その場合は、本シラバスはあくまでもたたき台として考えて、適宜、それぞれの専攻に関する文献を盛り込んだセッションを設けたり、幾つかのモジュールに分割したりすることが考えられる。

さらに本講義の講師は、いわば旧世代に属する教員であり、定性的研究の最新の動向には不案内であるという点もこのシラバスの限界であろう。したがって、今後は最先端の動向をふまえて大幅に内容と構成を変えたり、いわば「ゼロベース」で新たにシラバスを作り直したりしていくことを考えた方が良いだろう。

引用文献

- 金井壽宏・佐藤郁哉・ギデオンのクンダ・ジョン・ヴァン・マーネン (2011)『組織エスノグラフィー』有斐閣。
 佐藤郁哉 (2021)『はじめての経営学 ビジネス・リサーチ』東洋経済新報社。
 ——— (2022)「プッシュボタン式統計調査の効用と限界 (2): 神と悪魔はコンマ以下に宿る?」『同志社商学』第74巻第3号。
 盛山和夫 (2004)『社会調査法入門』有斐閣。
 Van Maanen, J. (2011) *Tales of the Field* (2nd ed.) University of Chicago Press.
 Ragin, C. (1992) "Introduction: Cases of 'What is a Case?'" In Ragin, C. C. and H. S. Becker (eds.) *What is a Case? Exploring the Foundations of Social Inquiry*. Cambridge University Press, Pp.1-17.
 ——— (1994) *Constructing Social Research*. Pine Forge.
 Smithson, M. (2000) *Statistics with Confidence*. SAGE

Ⅲ Syllabus の特徴と留意点

冒頭でも述べたように、本稿では著者の作成した syllabus を、学部・大学院を問わず一般的に通用するような一種のモデルないし規範的な「型」として提示しているわけではない。事実、上記の syllabus は大学院、特に研究者養成課程に在籍する大学院生向けの入門コースを想定して作成したものである。著者が本学および前任校等で作成して使用している syllabus の中には、これと比べればかなり簡便な例が少なくない。

また、この syllabus は授業の参考資料というよりは、むしろ「文献ガイド」ないし「文献解題」に近い性格を持っているという点についても注意が必要であろう。これは、退職を間近に控えた著者が、より若い世代の同僚に研究方法論(定性)という名称の講義を継承していただく際に参考資料の1つになることを念頭において作成したからでもある。(一方で、このような文献ガイド的な syllabus が大学院生にとっても、将来にわたって関連する文献を読み込んでいく上である程度有効な手引きになることを期待したという事情もある。)

事実、著者自身が留学先の米国の大学で受講した学部性および大学院生向けの講義の際に配付された syllabus の場合には、上で紹介したような、比較的詳細な文献ガイド風の例はそれほど多くはない。その点は、例えば、著者があるところでその一部を紹介した3点の syllabus (内1点がフィールドワークの方法論に関するもの、2点は組織論に関する講義で使用された例である)(佐藤 2010: 304-308)についても指摘できる。これら3例では、各回の講義あるいは特定の講義モジュールの狙いに関しては比較的詳細な解説がなされており、また必読文献に加えて推奨文献も挙げられている。しかし、それぞれの文献については基本的な書誌情報の後に読書課題(reading assignments)となる部分を指定したりする程度の記載内容になっている。つまり、特に「文献解題」的な解説がなされているわけではないのである。

また、例えば米国の大学における学部向けの入門コース——いわゆる「200番台のコース」——などのような場合には、特定の教科書を1点か2点挙げた上で、各回の講義内容に該当する節やページを挙げるといった程度の記載内容で済ませている例も多い。その意味では、その種の syllabus は図1で取りあげた和風シラバスとの類似点は少ないとも言える。

もっとも、先に指摘したように、和風シラバスと比較した場合の syllabus の顕著な特徴はその多様性である。それは、高等教育機関で提供される講義の内容や狙いあるいは教員の講義スタイルおよび理念がきわめて多様であるという事実に照らしてみれば当然過ぎるほど当然の状況であろう。したがって、それらの、本来多様なものであるべき教育内容を和風シラバスのような画一的なフォーマットに押し込めるといことは、(あえ

て極端な表現を用いれば) 高等教育を「プロクルステスの寝台」の上に横たえてしまうような試みであるとさえ言えるのである。

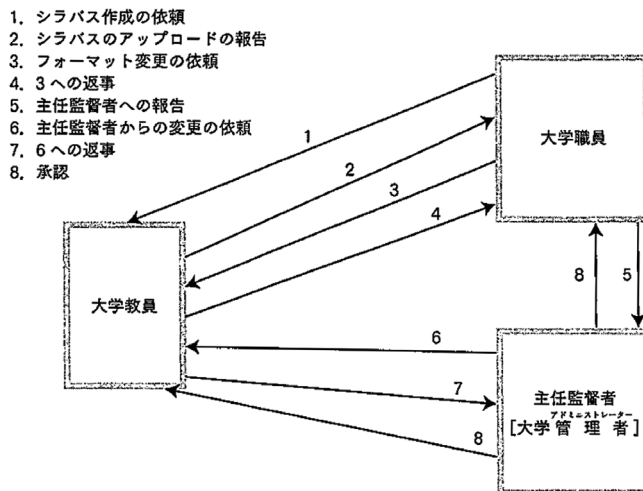
おわりに：*shirabasu/syllabus* づくり = ブルシット・ジョブズ？

かなり長大なものになってしまったこの論考を閉じるにあたって、ある可能性に対して注意を喚起しておきたいと思う。それは、本稿を通して「本家本元」ないし「本物」として扱ってきた syllabus に含まれていた多様性が現在失われつつあるかも知れない、という可能性である。

それを示す1つの例が図2Aである。

これは2018年に刊行されて世界的なベストセラーになったデヴィッド・グレーバーの *Bullshit Jobs: A Theory* (2018) の訳書に掲載されていた図である。グレーバーによれば、この図は、豪州のクイーンズランドにある大学でシラバス⁴を作成する際に要求されていた作業手順である。その大学は、経営管理主義 (managerialism) が徹底しており、全ての教材を統一されたフォーマットに従って作成することが要求されているのだという。

図2A 経営管理主義的な大学におけるシラバスの作成手順



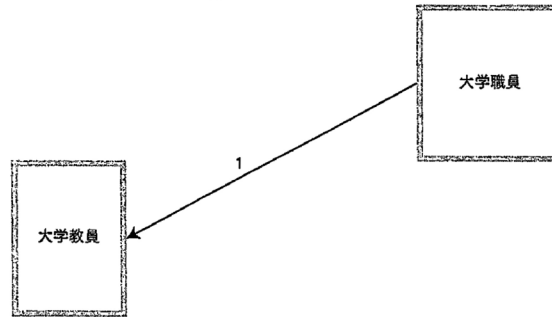
出所：グレーバー (2020: 339)

グレーバーは、この込み入った手順を、図2Bに示された非・経営管理主義的な (non-managerial) 大学における syllabus の作成手順と対比させることによって、大学における業務が「ブルシット化」しつつあることを示している。

さて、本稿の読者のうち日本の大学に教員あるいは職員として奉職している人々にとっては、図2Aと2Bのどちらがより馴染み深いものだろうか？

4 ここで syllabus ではなく「シラバス」をあてているのは、決して誤植ではない。

図 2 B 非・経営管理主義的な大学におけるシラバスの作成手順

1. 講義の録音にかんする大学の方針を
シラバスに記載してほしいとの要請

出所：グレーバー (2020: 339)

著者は寡聞にして、グレーバーが事例として取りあげているクイーンズランドの大学以外の豪州の大学において、シラバスが実際に図 2 A のような手順で作成されている例を知らない。また、豪州以外で、シラバス作成に限らず同じような経営管理主義が大学における教員や研究に浸透している程度についても多くを知っているわけではない。⁵

しかし、もし「本家本元」であるはずの欧米の大学においても、組織運営の広範な領域において図 2 A に示されたような煩瑣で「ブルシット」な手続きが蔓延しているのだとしたら、それについてはどう考えていくべきであろうか？ その場合、我々は、社会全体の動向との関連で syllabus の作成法や使用法をはじめとする大学教育のあり方について根本的なレベルで再考していかなければならないのかも知れないのであろう。

引用文献

川嶋太津夫 (2018) 「日本の大学は、なぜ変わらないのか？ 変わらないのか？」 佐藤郁哉編著 『50 年目の「大学解体」20 年後の大学再生』 京都学術出版会。

グレーバー, D. (酒井隆史・芳賀達彦・盛田和樹訳) (2020) 『ブルシット・ジョブ: クソどうでもいい仕事の理論』 岩波書店。

佐藤郁哉 (2010) 「参与観察 vs. エスノグラフィー」 金井壽宏・佐藤郁哉・ギデオ・クンダ, ジョン・ヴァン・マーネン 『組織エスノグラフィー』 有斐閣。

——— (2019 a) 「Syllabus とシラバスのあいだ: 大学改革をめぐる実質化と形骸化のミスマネジメントサイクルを越えて」 『同志社商学』 第 71 巻第 1 号, pp.23-64。

——— (2019 b) 『大学改革の迷走』 筑摩書房。

佐藤郁哉・山田真茂留 (2004) 『制度と文化 組織を動かす見えない力』 日本経済新聞出版社。

トゥーリッシュ, D. (佐藤郁哉訳) 『経営学の危機: 詐術・欺瞞・無意味な研究』 白桃書房。

文部科学省 (2013) 「平成 25 年度 私立大学等改革総合支援事業調査票」

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm

文部省高等教育局 (1991) 「大学審議会ニュース」 No.8 (1991 年 2 月) 文部省。

5 ただし、著者が最近訳出した英国の経営学者デニス・トゥーリッシュによる著書 (トゥーリッシュ 2022) は、英国や豪州ではかなり経営管理主義が大学運営の広範な分野に浸透している可能性を示唆している。